キャラクター名
日隠 柊和(ﾋｶﾞｸｼ ﾋｮﾘ)

プレイヤー名

シンドローム	バロール ブラックドッグ	ワークス	大学生	カヴァー	大学生
オプショナル		年齢	19	性別	男
覚醒	渇望	衝動	飢餓	初期侵食率	31 %
出自	天涯孤独	経験	殺傷	邂逅	師匠

	基本値	ワークス	ボーナス	成長	他修正	能力値
肉体	2	0	0			2
感覚	2	0	0			2
精神	3	1	0			4
社会	1	0	0			1

HP	28
行動値	8
(非装備時)	8
戦闘移動	13
全力移動	26

肉体			感覚			精神			社会		
技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正
白兵			射撃			ＲＣ	10		交渉		
回避	1		知覚			意志	1		調達	3	
運転：	2		芸術：			知識：	2		情報： 学問	1	
運転：			芸術：			知識：			情報：		
運転：			芸術：			知識：			情報：		
運転：			芸術：			知識：			情報：		
運転：			芸術：			知識：			情報：		

武器・コンボ	能力	命中値	G値	攻撃力	射程	メモ
		0				

防具	価格	装甲	回避	行動	メモ

合計装甲：	0	合計回避：	0

所持品

ロイス

対象	感情(pos)	感情(neg)	タイタス	消費
亜純血	P	N		
日隠 陽芽	P 感服	N 食傷		
被害者親族	P 同情	N 嫌気		
立花漉奈	P 好意	N 隔意		
来栖 未緒	P 好奇心	N 脅威		
佐藤 実姫	P 庇護	N 無関心		
	P	N		

最大財産P: 8	残り財産P：

スキル名	SL	コスト	タイミング	射程	対象	判定	制限	メモ
ワーディング	★	-	オート	視界	シーン	自動	-	
効果： 非オーヴァードのエキストラ化								
リザレクト	0	1d10	気絶時	-	自身	自動	↓100	
効果： コスト分のHPで復活								
コンセントレイト	3	2	メジャー					
効果： c-[SL]								
雷の槍	5	2	メジャー	視界		対決		
効果： Da+[SL*2+4],Di-1								
雷神の槌	2	3	メジャー	視界	範囲(選択)	対決		
効果： Da+6								
黒の鉄槌	1	1	メジャー	視界		対決		
効果： Da+[LV*2+2]								
黒星の門	1	2	メジャー				P	
効果： [至近不可]打ち消し。Di+[SL+1]								
紫電一閃	1	6	メジャー			対決		
効果： C-1								
覇皇幻魔眼	3	5	メジャー		単体	対決	80↑	
効果： Da+[SL*5]								
マグネットフォース	1	2	オート	至近	自身	自動		
効果： カバーリング								
タッピング&オンエア	★							
効果： いじれる！！！								
セキュリティカット	★							
効果： きるぞ！！！！								
効果：								
効果：								
効果：								

「クソ、いきなり何だってんだよ！？」

　俺――名前は使わなくなって久しいので咄嗟に出てこない――は、突然蹴り開かれたドアから飛んでくる銃撃に舌打ちを漏らすしかできなかった。東京の廃ビルで暮らしていればマナーも礼儀も食えたもんじゃないのは分かっていたが、それにしたって挨拶が粗過ぎる。浮浪者でもここまで喧嘩ッ早い奴はいないだろう。最近ここまで恨みを買った覚えはないと泣き言を漏らしたいのを抑え込んで、ジャンクのタワーPCの裏に隠れて厄介な客の存在を"ブッ飛ばして"やろうと認識を凝らした。

　不躾な来客は、蹴破ったドアを気にする様子もなく歩を進める。中にいるであろう俺に怒鳴りつけるでもなく、淡々と。俺は不審に思う他なかった。ルール無用、試合開始のゴングさえ待てない奴が感情を一欠片たりとも見せずに、相手は最悪死んでもいいやくらいの凶行に出るものか？
　短い時間だが、息を整えるがてら考えてみても、"発声器官の付いてない化物"以外の答えが出てこない。そんなモンいるわけないだろ。そうこうしている間に、再び銃撃音が鳴り響いた。その音で"化物"の位置は特定できたが、それ以上に激しい音が俺の耳を貫いた。

　視界の端で、細かい部品がバラバラと散らばっていくのが見える。間違いない。俺が三か月掛けてちまちま集めた――かっぱらってきたとも言う――ジャンクの塊だが動けるレベルにまで仕上げたPCが、文字通りバラバラと音を立てて粉砕されたのだ。
　視界が真っ赤に染まる思いだった。PCの替えはあるが、いい加減新しいものが必要だとせっせと集めていた代物をこんな物の価値もわからんようなボケ野郎に一瞬で破壊されていい訳がない。

「何すんだ――」

　そう言いかけた俺の喉は、一瞬で閉ざされることになる。軌道さえ見えないほどの速度で接近してきた女が、俺の喉仏にナイフを突きつけてきたからだ。

「静かにして」